

「愛染明王石仏」

市指定有形民俗文化財
昭和61年12月8日指定

25



問合せ
大利根教育事務所
(☎0480・72・1323)



所在地 旗井660 堤防下

今回紹介する愛染明王石仏は、旗井神社に隣接する道路を堤防に向かつて約800メートル直進した堤防のすそにあります。十九夜様庚申様、馬頭観音などの供養塔があり、中央に愛染明王を刻んだ像があります。

愛染明王は元来、インドの愛をつかさどる神で平安初期、遣唐使として海を渡った空海により真言密教とともに伝来しました。この明王は愛欲煩惱を浄化し、解脱に導く、「煩惱即菩提」の神です。その姿は、頭上に獅子の冠をかぶり、目は三眼、六本の手には弓矢などを持ち、忿怒の相をしています。鎌倉時代には、その様相から武士の信仰を集めました。近世になると愛

染の言葉「逢い初め」や「愛敬」に通じるとされ、男女の縁結び・恋愛成就の神として花柳界や芸能界の人々に信仰されるようになりました。また、愛染が藍染に通じるとして染物業者に信仰されたといわれています。石仏の造立の目的は記されていませんが、『武蔵國郡村誌』によれば、幕末期、この地は穀物の生産が主体でしたが、副業として砂地を利用して藍葉の作付け、藍玉の生産が行われていました。また、利根川沿いに紺屋(染物業)が点在し、さらに藍玉を取引する問屋もあったことなど考えると藍作り農家が守護神として造立したものと考えられます。

この像は関東地方にわずかに存在する珍しいもので、一見する価値があります。



紹介者 小沼 良市さん(旗井)